

成佑吾「詩之防禦戦」と北京星星文学社『文学週刊』：論：魯迅『野草』と成佑吾

秋吉, 收
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/4377784>

出版情報：言語科学. 56, pp.27-45, 2021-03-23. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

成仿吾「詩之防禦戦」と北京星星文学社『文学週刊』 ——再論：魯迅『野草』と成仿吾

秋吉 收 (Shu AKIYOSHI)

はじめに

先日、過去の拙論二篇、「徐玉諾と魯迅—散文詩集『野草』をめぐって—」（1992年12月『中国文学論集』第21号）、「魯迅『野草』誕生における“批評家”成仿吾の位置」（2015年8月『野草』第96号）に対して、中国人研究者（以下、Y氏と記す）から批判的な議論が提出された¹。大略、拙論が然るべき方向性を遵守せずに魯迅のイメージを損ない、極めて有害であるという主張のようだ。議論の方向性はともかく、仔細に読んでみると、Y氏の行論には、事実の誤認や、拙文の原意について見誤っていると思われる箇所があり、やはり小文をものすことにした。

今回、以前の拙論を改めて検討・調査する過程で、積み残していた宿題を完成することができ、また新たな発見もあった。「再論」と名付ける所以である。以下、Y氏が取り上げる順に、「成仿吾」・「徐玉諾」再論を展開したい。

1. 「魯迅『野草』と成仿吾」再論

「狂人日記」「孔乙己」「阿Q正伝」を含む、魯迅の最初のかつ代表小説集たる『呐喊』（1923）を悪辣に罵倒したことや、魯迅と激烈な革命文学論争（1927—28）を繰り広げたことでは有名な成仿吾だが、魯迅の散文詩集『野草』との関係については一切言及されたことがなかった。拙論、「魯迅『野草』誕生における“批評家”成仿吾の位置」は、その成仿吾を魯迅『野草』と初めて関連付けた論考である。

1.1 「詩之防禦戦」

まず、拙論より引用させて頂く。²

魯迅が幾度となく嫌みたっぷりに「批評家」と記すように、成仿吾はそれを強く自負していたし、実際に遺した文章の多くは批評（評論）文である。だが意外にも彼の文学活動の出発は「詩」作にあった。（中略）そうした彼が“満を持して”、『創造週報』創刊号（1923年5月）に掲載したのが以下に引く「詩之防禦戦」であった。魯迅が散文詩集『野草』の筆を執るちょうど一年前のことである。

¹ 2020年第3期『新文学史料』掲載、閻晶明「必須要做的辨正—關於日本学者秋吉收的《野草》觀」。

² 以下、論点を明確にするため、引用文に下線・太字等を付した部分があるが、注記のない限りすべて引用者による。

試みに私たちの詩の王宮がいまどうなっているか見てみよう。

かつての腐敗しきった宮殿を私たちが打倒し、ここ数年かけて新たに建造しているところの王宮を。何ということだ、王宮の内外至る所に**野草**が蔓延ってしまった。可哀想な王宮よ！ 痛ましき王宮！

口だけではあてにならぬ、これら**野草**を幾つか抜き出し論じてみよう。

一、**胡適**の『**嘗試集**』……これは一体何なのか見当もつかない。……、二、**康白情**の『**草兒**』……可笑しくて、お腹がよじれそうだ。……、三、**俞平伯**の『**冬夜**』……何だこりゃ？ さっさと退場しろ！……、四、**周作人**……このようなものを詩とは呼ばぬ、見聞に過ぎず……、五、**徐玉諾**の『**将来之花園**』……こんな文章、小説にしたってお粗末極まる。(中略)

もう手が痛くなったし、頭痛がする！ 読者もこれら詩の名品の数々を前に、もう目がかすんで頭も痛いことだろう。計画変更、もう**野草**を一本一本洗い清めることはやめにする。

蔓延する**野草**ども、僕らはやつらに対して早急なる防禦戦を挑まねばならぬ。(中略) こんなものが詩と呼べるなら、私たちの詩壇は一体どこまで墮落してしまうことか。立ち上がって詩の王宮を守るのだ。僕は青年詩人たちと協力してこの詩の防禦戦をやり抜く覚悟だ！

成仿吾は、創造社が仇敵と目する**文学研究会派の代表詩人や胡適、周作人など文壇の大御所**を徹底的になで切りにした。

拙論のこの部分に対して、Y氏は以下のように述べる。

1923年5月、成仿吾在《创造周刊》创刊号上发表《诗之防御战》，对“五四”初期以来的诗人创作又来了个全盘否定。其中就包括**胡适的《尝试集》，康白情的《草儿》，俞平伯的《冬夜》，周作人的散见白话诗，等等**。(中略) **秋吉收认为，成仿吾此文**的攻击目标以“**文学研究会的代表诗人**”为主。然而很明显，打头的胡适，其次的康白情都不是文学研究会成员。俞平伯、周作人也都算不上“代表诗人”。(中略) **成仿吾此文并不是特别针对文学研究会** (102頁)

Y氏は、「**秋吉は“文学研究会的代表诗人”を成仿吾の主たる攻撃目標と見なす**」と書くが、まずこれはやや誤認である。拙論は成仿吾の攻撃対象として「**文学研究会派の代表詩人”や”胡適、周作人など文壇の大御所**」と書く。「文学研究会派の代表詩人」と「胡適、周作人など文壇の大御所」は並列であり、「文学研究会」を特に強調するわけではない。

またY氏は、「**成仿吾のこの文は決して特に文学研究会に向けられたものではない**」と断言されるが、果たしてそうであろうか。

この成仿吾「詩之防禦戦」(1923年5月)の3ヶ月前、成仿吾は論文「創造社與文学研究会」(1923年2月1日『創造季刊』1巻4期)を書いており、そこに次のようにある。

因為文學研究會成立的時候，氣焰正盛，一見我們沒有理會他們，很覺得我們是一些大膽的狂徒，無聊的闖入者，就想只等我們把頭現出來，要加我們以兇狠的猛擊。我們對於這種天外飛來的奇冤與無故相加的狂暴，據我一個人的意思，實在沒有值得去理會的價值；不過郁達夫或者實在忍不下去了，纔開始了我們的防禦工事；而我們的行為，始終是防禦的——正當的防禦的。³

タイトルからも明らかのように、成仿吾は文学研究会への対決姿勢を明確に打ち出し、そこには「私たちの**防禦**」「正当な**防禦**」の文字が並ぶ。この「創造社與文学研究会」の3ヶ月後に書かれた「詩之**防禦戰**」が、文学研究会を全く意識していなかったとは言えない。むしろ、強烈に文学研究会を意識して書かれたのが「詩之**防禦戰**」ではなかったか。

成仿吾のこの文については、伊藤虎丸編『創造社研究 創造社資料別巻』（1979年、アジア出版）に収める小谷一郎編『創造社年表』「補注（4）創造社と文学研究会との「対立」」が参考になる。

創造社と文学研究会との「対立」について、その争点らしきものを端的に示しているものに、成仿吾の「**創造社與文学研究会**」がある。（中略）両者の「対立」は、創造社があとから出来たものなのに、文学研究会からの再三の勧誘に応じなかったことに起因していることになる。創造社があとから出来たかどうかは別として、こうした「対立」に至る背景には、雑誌を刊行するための書店さがしで難航した創造社の側の中に、文学研究会が商務印書館を後だてにしていることへの何らかの気持ちはあっただろう。（中略）《小説月報》と《文学旬刊》（のちの《文学週報》）をもつ文学研究会に対し、《創造》季刊と自分たちの刊行物ではない《学燈》だけでは、郭沫若、郁達夫、成仿吾等は十分な応酬ができなかったようだ。たとえば、成仿吾の「**創造社與文学研究会**」は、はじめ《学燈》に投稿したが、送り返され、《創造》季刊に掲載したものであった。このため、文学研究会の《文学週報》に対応するような機動性のある雑誌が彼らには必要だった。そして、このことが《創造週報》の創刊へとつながっていくのである。⁴

文学研究会の『文学週報』に対抗して創刊された『創造週報』、その創刊号に掲載されたのが、成仿吾「詩之防禦戰」だったのである。仔細に誌面を繙けば、1923年5月13日、上海亜泰函書局発行の『創造週報』第一号、巻頭には郭沫若の詩「創世工程之第七日（発刊詞）」が掲げられ、それに続けて11頁に及ぶ成仿吾「詩之防禦戰」、続いてやはり郭沫若による二篇の短い翻訳「査拉圖司屈拉」（尼采原著）、「迷娘歌」（歌德著）が掲載されるのみ。成仿吾「詩之防禦戰」は全体15頁のうちの11頁を占め、つまり『創造週報』創刊号はいわば成仿吾のこの過激な挑戦文のために出されたようなものである。

さて、Y氏の論文に戻るが、そこには次のようにあった。

³ 以下、小論で使用する創造社刊行雑誌原本は基本的に、伊藤虎丸編『中国研究文献2 創造社資料』（1979年、アジア出版）版によった。なお、すべて翻訳は断りのない限り拙訳による。

⁴ 小谷一郎編『創造社年表』「補注（4）創造社と文学研究会との「対立」」。伊藤虎丸編『創造社研究 創造社資料別巻』（1979年、アジア出版）、147頁。

《詩之防禦戦》、对“五四”初期以来的诗人创作又来了个全盘否定。其中就包括胡适的《尝试集》、康白情的《草儿》、俞平伯的《冬夜》、周作人的散见白话诗，等等。(中略)打头的胡适，其次的康白情都不是文学研究会成员。俞平伯、周作人也都不算上“代表诗人”。(102頁)

ここでY氏が強調したいのは、成仿吾「詩之防禦戦」には「文学研究会の“代表诗人”」が含まれないことである。その証拠としてY氏は、成仿吾が名指しで批判した胡適、康白情、俞平伯、周作人の“4人”を挙げる。だが「詩之防禦戦」で成仿吾が名指しで批判した詩人は最初の引用からも明らかなように“5人”であった。Y氏が挙げなかった残りの一人とは、徐玉諾である。そして、徐玉諾は当時、まごうかたなき「文学研究会“代表诗人”」であった。拙論でわざわざ「文学研究会派の代表诗人」と書いたのは他にもない、徐玉諾を強く意識してのことである⁵。彼を無視することはできない。

Y氏が5人中4人まで挙げながら、不自然なまでにわざわざ徐玉諾一人を排除した理由は不明だが、以下のような推測は成り立つだろう。つまり、現代通行する一般的な「文学史記述」の上で、Y氏が挙げる4名は極めてポピュラー、また北京や上海といった“中心”で活躍した文人であるのに比して、徐玉諾は河南省の貧困農家の出身で、ほぼ一貫して“地方”から文壇に参与し、その中心的な活動期間もほぼ3年ほどと短かった。抗日戦争中の国民党での活動や周作人との友好関係等々が影響した可能性も排除できないと考えるが、いずれにしろ文学史では殆ど無視されていると言っても過言ではない。そうした現実を背景に、Y氏が徐玉諾を取るに足らぬと判断されたのも恐らくは故なしとしない。⁶

だが実際には、当時における徐玉諾の活躍はめざましいものがある。「はじめに」で書いた如く、拙文の「下篇」は「徐玉諾」再論となる。“無名”であるが実際には重要な意味を有するこの詩人について、ここで少し触れておくことにしたい。

1.2 「(散文) 詩人」徐玉諾

徐玉諾(1894-1958)は河南省魯山県の貧困な農家に生まれた。幼い頃より優秀で、辛亥革命後開封に設立された河南第一師範学校に官費入学。古文に長じ、桐城派の後継者と目されるほどであったが、雑誌『新青年』の影響を受け徐々に新思想、新文学を志すようになる。1919年の五四運動に際しては河南での「学生連合会」理事を務めるなど社会運動に身を投じるが、運動挫折の後には文学の世界に身を投じることになる。作家としての彼の経歴を辿る時、特筆すべきは、彼は他の多数の作家たちのように、認められるとすぐに都市に出て中央の文壇で筆を執るのではなく、自身河南の農村を拠点としつつ一貫して目前

⁵ 拙著『魯迅 野草と雑草』(2016年、九州大学出版会)にも拙論(改訂版)を収めるが、この部分に「“代表诗人”として徐玉諾も引かれるが、当時における徐玉諾の重要性が改めて確認できよう。」と書き添えた。

⁶ Y氏はまた、成仿吾「詩之防禦戦」が「小詩」や「日本短歌俳句」紹介等に代表される周作人の活動を執拗に攻撃することをもって、周作人と断絶した魯迅が「詩之防禦戦」にさして反感を抱かなかった根拠とする(102頁)が、果たしてそうであろうか。まず「詩之防禦戦」が発表された1923年5月に魯迅周作人の兄弟は断絶してはおらず(“断絶”の起点は1923年7月19日に周作人から魯迅に送られた手紙)、また断絶後にしても、魯迅は距離を置きながらも「文学上」は周作人と完全には袂を分かっている。Y氏の言うように、成仿吾がタゴールを批判したことに魯迅が“同調”した可能性は否定しないが。

の農村の実状を写し取ったことであろう。

1921年1月、徐玉諾の第一作（白話小説）「良心」が、文学研究会創立メンバーの一人郭紹虞の推薦によって北京『晨报副刊』に掲載されたのを皮切りに、結成されて間もない文学研究会の一員として中央の文壇にデビューした徐玉諾は、1921年から23年までの三年間に集中的に約三百篇を執筆するなど極めて意欲的に詩作に取り組んでおり、文学研究会機関誌『文学旬刊』や『詩』月刊、『小説月報』等の紙面を賑わせている。当時の文壇における彼の位置を顕著に表すものとして、1922年6月に「文学研究会叢書」の一冊として編まれた会員八人の共同詩集『雪朝』⁷を挙げるができる。その収録作家及び作品数は次の通りである。

朱自清（19篇）、周作人（27篇）、兪平伯（15篇）、**徐玉諾（48篇）**、
郭紹虞（16篇）、葉紹鈞（15篇）、劉延陵（13篇）、鄭振鐸（34篇）

ここに名を列ねるのは、いずれも文学研究会の錚々たるメンバーであり、この『雪朝』の出版は、新詩の模索段階にあった当時の文壇に多大な影響を及ぼしている。その中であって徐玉諾の詩が48篇と最も多く採用されたことは、彼が既にいかに重視されていたかを端的に物語っている⁸。そして詩壇における徐玉諾の名前を更に決定付けたのが、『雪朝』出版の2ヵ月後、1922年8月に同じく「文学研究会叢書」の一冊として出版された徐玉諾個人の詩集『将来之花園』⁹であった。これは個人による白話詩集としては、胡適の『嘗試集』（1920）、郭沫若の『女神』（1921）に継ぐもので、聞一多の賞賛¹⁰や成仿吾「詩之防禦戦」の批判を始め文壇各派からの強い反響を呼んでいる。このように徐玉諾は新詩の開拓者として極めて重要な役割を果たしていた。また特に注目したいのは、彼が新詩のなかでも特に「散文詩」創作に意を注いだことである。彼の詩集『将来之花園』にもその傾向は顕著であり、同時期に出版された兪平伯の『冬夜』（1922年3月）や康白情の『草兒』（1922年3月）、汪静之の『蕙的風』（1922年8月）などが散文詩の実験作を僅か1・2篇収録するのに対して、『将来之花園』はその紙面の三分の一以上が散文詩で占められている。中国伝統詩歌の基盤を揺るがす画期的な形式と意義を有する新詩の前衛派たる「散文詩」は、ボードレールやツルゲーネフを先達として、当時実践が試みられていた。そうした時代背景の下で、「散文詩人」徐玉諾の姿は更にクローズアップされることになる。

1921年の末から22年にかけて文学研究会機関誌、上海『時事新報・文学旬刊』誌上で展開された新旧詩論争は、散文詩の是非に論議が集中したという点でとりわけ注目される。

⁷ 『雪朝』 1923年6月、上海商務印書館。初版及び1933年3月版本を参照した。

⁸ 「小説月報叢刊 第五十八種」として1925年4月に上海商務印書館より出版された『眷顧（新詩集）』でも、朱自清、梁宗岱、兪平伯、徐志摩ら29人の新詩57篇の中で、徐玉諾の作品は9題11篇で最多を数える。この事実も、同様に徐玉諾の「代表詩人」性を物語る。

⁹ 徐玉諾『将来之花園』 1922年8月、上海商務印書館。小論では中国国家図書館蔵初版本および1931年5月第五版本を参照した。1922年1月6日より5月11日までに書かれた新詩95題116篇を収める。

¹⁰ 聞一多「致梁実秋」（1922年12月26日、シカゴより）に次のような言葉が見える。“《未來之花園》在其種類中要算佳品。……《記憶》《海鷗》《雜詩》《故鄉》是上等的作品，《夜聲》《踏夢》是超等的作品。……徐玉諾是個詩人。”『聞一多全集 第12卷（書信・日記・附録）』（1993年、湖北人民出版社）、127頁。

- 第19期（1921年11月12日）
- ・骸骨之迷恋 葉聖陶
- 第21期（1921年12月1日）
- ・詩壇的逆流 卜 向
- 第23期（1921年12月21日）
- ・論**散文詩** 劉延陵
 - ・「屍」 **徐玉諾**
 - ・對於旧体詩的我見 吳文祺
 - ・為新詩家進一言 王警濤
- 第24期（1922年1月1日）
- ・論**散文詩** 鄭振鐸
 - ・「沒什麼」 **徐玉諾**
- 第25期（1922年1月11日）
- ・讀了「論**散文詩**」以後 王平陵
- 第27期（1922年2月1日）
- ・論**散文詩** 滕 固
- 第31期（1922年3月12日）
- ・駁反对白話詩者 郎 損（茅盾：引用者注）
 - ・「打不断的念頭」 **徐玉諾**
 - ・「病子院的一角」 **徐玉諾**
- 第32期（1922年3月21日）
- ・「山」 **徐玉諾**
 - ・「母親」 **徐玉諾**
- 第33期（1922年4月1日）
- ・駁郎損君「駁反对白話詩者」 錢鵝湖
- 第35期（1922年4月21日）
- ・「他的現在」 **徐玉諾**
 - ・「生活与性靈」 **徐玉諾**
 - ・「人生的現實」 **徐玉諾**
- 第37期（1922年5月11日）
- ・對於一個**散文詩**作者表一些敬意！ 王任叔
- 第39期（1922年6月1日）
- ・**玉諾**的詩 葉聖陶

実際に論争の経過を辿ってみると、鄭振鐸の「論散文詩」等、文学理論の文章に挟み込まれるようにして、徐玉諾の詩が多数掲載されている。その他にも王統照や俞平伯、タゴールの訳詩なども見えてはいるが、当該論争における「詩人」徐玉諾の存在は際立っており、文学研究会の中で実作の面から散文詩運動を支えていた事実が確認される。第37期に

は「散文詩作家」徐玉諾を称賛する王任叔の文章が掲載され、約半年にかけて展開されたこの論争も終息に向かう。そして1922年6月、文学研究会会員の共同詩集『雪朝』出版と時を同じくして発行された第39期には、長篇の評論「玉諾の詩」が葉聖陶によって書かれ、その二ヵ月後、1922年8月に、徐玉諾詩集『将来之花園』が出版されることになる。

当時において、徐玉諾は、押しも押されぬ「文学研究会“代表詩人”」であった。¹¹

1.3 成仿吾と魯迅『野草』

さて、ここで話をまた成仿吾「詩之防禦戦」及びその掲載誌『創造週報』に戻したい。以下、Y氏が批判する拙論の内容を参照しつつ考察を進めたい。

「詩之防禦戦」を掲載した『創造週報』とは如何なる雑誌だったのだろうか。1922年5月創刊、創造社最初の機関誌『創造季刊』は、創作に加えて翻訳や成仿吾「『呐喊』的評論」（1924年2月『創造季刊』2巻2号）等で極めて意欲的に活動したが、賑わうほどにその場は手狭となり、新たな地平を切り拓くべく用意されたのが、見てきたようにそのタイトルからして文学研究会への対抗意識露わなる『創造週報』だった。『創造季刊』2巻1号の巻末には、「預告 創造週報」と題して、「我々のこの週報の性格はと言えば、我々の季刊と姉妹関係を為す。だが両者はその方針をやや異にし、季刊はもとより創作を主とし、評論や紹介を従とするが、このたびの週報は評論や紹介を主とし、創作を従とする予定である。（後略）創造社啓事 四月三十日。」と宣言されている。その趣旨に悖ることなく、創刊号を飾った論文が成仿吾の「詩之防禦戦」であった。

だが、同時に複数の雑誌を運営し、その質を維持していくことは並大抵のことではなかった。回想記『創造十年』（1932）で郭沫若は次のように述べている。

仿吾は非常に勇敢で、「週報」第一号から「詩之防禦戦」なる爆弾を投げつけ、当時開北に築かれていた中国のいわゆる詩壇を爆撃した。それはおそらく今年の開北がやられたよりもひどかったろう。あの文章は仿吾以外には誰も書けないものだった。なぜといって、多少とも飯の問題を気にする人なら、誰があえてあんな文章を書くだろう。少なくとも私には書けない。（中略）仿吾はこの文章のために胡適大博士、周作人大導師及び文学研究会の大賢小賢たちの御機嫌を損じてしまった。それにまた仿吾の受けた報いも

¹¹ 注8にも引いたが、徐玉諾の文学研究会における位置を顕現する成就として、後の1925年4月に上海商務印書館より出版された「小説月報叢刊」第五十八種『眷顧（新詩集）』がある。『雪朝』が文学研究会同人詩集であったのに比して、こちらは広範な作者を涉猟しており、朱自清、梁宗岱、兪平伯、徐志摩ら29人の新詩57篇を収める。その中で、徐玉諾の作品は9題11篇でやはり最多を占める。Y氏はこの詩集について、徐玉諾の1925年における成就と位置付けるが、正確ではない。なぜなら徐玉諾の11篇はすべて「1923年」に、文学研究会機関誌『小説月報』を中心としてそれぞれの新聞（文芸別冊）・雑誌に発表された旧作である。Y氏は『眷顧（新詩集）』を『徐玉諾詩文輯存』（2008年、河南大学出版社）に依り、原本は見えておられないよう（109頁）なので、以下、11篇のタイトル及び初出を挙げておく。「火災」1923年1月10日『小説月報』14巻1号、「我的詩歌」1923年5月10日『小説月報』14巻5号、「假若我不是一个弱者」1923年2月23日『晨报副刊』14巻1号、1923年5月10日『小説月報』14巻5号再掲、「小詩一」1923年6月10日『小説月報』14巻6号、「小詩二」1923年6月10日『小説月報』14巻6号、「永在的真实」1923年9月10日『小説月報』14巻9号、「爲什么」1923年9月10日『小説月報』14巻9号、「小詩（三首）」1923年9月10日『小説月報』14巻9号、「悪花」1923年7月15日『文学旬刊（浅草社）』1923年12月10日『小説月報』14巻12号。

てきめんだった。彼は爆弾を使っていたのだが、相手の方が使ったのは毒ガスだった。¹²

成仿吾自身、「最終的に自分の居場所も見つからない状態に陥り、長年の友人すら次第に私のことを一文の値打ちもない奴と見なすようになった」（1924年4月13日『創造週報』48号）などと時に弱音を吐きさえしており、消沈していく様子が窺える。茅盾らの文学研究会が中国全土から多方面の投稿を受け入れて拡大成長していったのに対して、創造社の方は限られた同人サークルの枠組を突破することができなかった。『創造週報』の末路について、伊藤虎丸「創造社小史」の言葉を借りれば、

《週報》自体も、十数号を出すと、早くも「少しくたびれた感じ」（「創造十年」）になってくる。《創造日》の発刊を引き受けたことで負担は一層重くなり、いち早く訪れた疲労感に加えて、相変わらずの苦しい生活の中で同人間の感情的な亀裂も表面化してくる。こうして、一九二三年初めには、まず郁達夫が北京へ去り、翌年四月郭沫若も日本に去った後、《週報》は満一年で停刊する。¹³

しかし、成仿吾は白旗を揚げたわけではなかった。1924年5月19日発行『創造週報』52号（最終号）に彼は「批評と批評家」という題でこう記す。「真の文芸批評家の活動は、文芸活動そのものに等しい。彼が自己を表現するや、それはとりもなおさず完璧な信憑性を有する文芸批評となり、それこそがすなわち彼の文芸作品なのである。」ここには、「批評家」たる彼の矜持の念が（やや悔し紛れの感もあるが）力強く表明されている。また、同最終号にはやはり成仿吾執筆の「一年的回顧」が掲載され¹⁴、『創造週報』発刊当初の想いを次のように綴っている。「内容としては翻訳と批評を重視した。（……）私は、新詩壇の妖怪や悪魔どもを一掃し（原文：掃蕩新詩壇上の妖魔）、昨今の新詩を批評する文章を書かねばならないと誓ったのだ。」終刊を迎えながらも、創刊号掲載「詩之防御戦」当時の軒昂たる意気は彼の胸中で何ら衰えてはいなかったようだ。

こうして『創造週報』が命脈を絶たれた半年後の同年11月、入れ替わるように雑誌『語絲』が創刊される。その「創刊号」（1924年11月17日）に魯迅は「説不出」という文章を発表するが、そこに次のように書き付けていた。

批評家が最も安全なのは、創作を兼ねるのはやめることだ。かりに撫で斬りの筆をふるい、文壇上のすべての野草を一掃すれば（原文：掃蕩了文壇上一切野草）、当然、気分は爽快だろう。だが、もう天下に詩はなくなると考えて、創作に手を出そうものなら、いつもこんな代物を作り出さざるをえない。

¹² 郭沫若『創造十年』「十二」（1932年、上海現代書局）、『郭沫若全集 文学編 第12巻』（1992年、人民文学出版社）、169頁。丸山昇訳『創造十年』（『郭沫若自伝2』（1968年、平凡社「東洋文庫126」））を参照した。

¹³ 伊藤虎丸「創造社小史（解題）」『創造社研究 創造社資料別巻』（1979年、アジア出版）、9頁。

¹⁴ 該文の末尾には執筆期日として、1915年のこの日に日本の二十一箇条要求を袁世凱が批准したことを刻む「国恥紀念日」の文字が見える。

「批評家」成仿吾が『創造週報』最終号そして「詩之防禦戦」に用いた語（「掃蕩〜」「野草」）を逆手にとった辛辣な諷刺は、ストレートに成仿吾に向けて発せられたものであることを強く示唆する。魯迅は『語絲』創刊の晴れの号において、成仿吾の「詩之防禦戦」が結局は『創造週報』頓挫によって敗北を喫したことに對する言わば勝利宣言をものしたのではなかったか。そして、彼はその『語絲』第3期（1924年12月1日）から、自身初の本格的な新詩連作『野草』掲載を開始する。「野草」というそのタイトルは、「詩之防禦戦」で成仿吾が口を極めて罵った拙劣な新詩への侮蔑表現であったことは繰り返すまでもない。

*

魯迅の全著作の中で、直接成仿吾に言及した箇所は約五〇にも及ぶが、内容は千篇一律、諷刺と非難の繰り返言である。文学的、論理的反駁ならまだしも¹⁵、「罵倒」に終始するのは読む者を辟易させるほどだ。そうした成仿吾批判の急先鋒は『三閑集』（1932年、上海北新書局。1927年から29年に書いた雑文34篇収録）である。よく引かれる「“酔眼”中の朦朧」（1928年3月『語絲』4巻11期。成仿吾や李初梨らの提唱する革命文学に対し、相手の非難を逆手にとって徹底的に糾弾したもの）など名指しの批判は約半数が該集に集中しており、まさにその圧巻は「序言」の末尾に魯迅が書き付けた次の文句であった。

成仿吾以无产阶级之名，指为“有闲”，而且“有闲”还至于有三个¹⁶，却是至今还不能完全忘却的。（中略）编成而名之曰《三闲集》，尚以射仿吾也。¹⁷

公刊の書籍の「序文」にここまで臆面なく個人批判を表明することはやや常軌を逸している。成仿吾を「射る」ために、彼が他人を罵った言葉をそのまま用いて作品集に命名する、この作法は図らずも、同様に成仿吾「詩之防禦戦」に対して放たれた『野草』と一致する。成仿吾が「詩之防禦戦」で、「新詩の王宮の内外には至る所に“野草”（詩とは到底見なせない劣悪な詩）が蔓延り、……詩壇は墮落してしまう。」と口を極めて「野草」を侮辱したことに、魯迅は秘かに、だが強く反応した。「野草」を自己の詩集に冠したことで、成仿吾によって最も拙劣なものとしたその「野草」こそが（自分にとって）唯一の「詩草」であることを、高らかに宣言したのである。

以上が、成仿吾と魯迅『野草』の関係について考察した拙論の概要であるが、これに対してY氏は以下のように述べる。

¹⁵ 『奔流』編校後記「十一」（1928年8月。『集外集』所収）で、「中国でも誰かが何々主義を提唱していることは耳にする——成仿吾が表現主義を大いに論じ、高长虹が未来派をもって自認する類い」と書くのが、唯一の“文学的”諷刺である。

¹⁶ 成仿吾「完成我們的文学革命」（1927年1月『洪水』3巻25期。『成仿吾文集』（1985年、山東大学出版社）、211頁）に見える「以趣味為中心的生活基調子，它所暗示着的是一種小天地中自己騙自己的自足，它所矜持着的是閑暇，閑暇，第三個閑暇。」を踏まえる。

¹⁷ 『三閑集』序言（1932年4月24日執筆。引用は、魯迅が上海移住以降の論敵との闘争を振り返る長文の最後の一文である。成仿吾に対する怨恨の深さが改めて垣間見られる。『魯迅全集』第四巻、6頁。『三閑集』の出版をめぐる魯迅と創造社・太陽社間の確執の詳細については、竹内実「魯迅と柔石（一）」（1969年11月、河出書房新社『文芸』8巻11号）等参照。

秋吉收认为，鲁迅对成仿吾的“复仇”里，手段之一就是“野草”命名自己的唯一一本散文诗集。秋吉收的论证发挥了日本学者的考证功夫。（中略）（102頁）

如果上述讨论还是分析和推导为主，仍然可以见仁见智。然而，秋吉收文章中的一处不知是有意还是无意的材料解读，则让人难以理解。1924年11月，《语丝》创刊，创刊号上发表了鲁迅的杂感《“说不出”》。（中略）作者（秋吉收：引者）写道：鲁迅在《语丝》华丽的创刊号中宣告了对抗成仿吾《诗之防御战》（《周报》以挫败告终）的胜利。（中略）

可是，《鲁迅全集》（“说不出”的：引者）注释里明明这样告诉读者：

本篇最初发表于1924年11月17日北京《语丝》周刊第一期。**1923年12月8日北京星星文学社《文学周刊》第十七号发表周灵均《删诗》一文**，把胡适《尝试集》、郭沫若《女神》、康白情《草儿》、俞平伯《冬夜》、徐玉诺《将来的花园》、朱自清、叶绍钧《雪朝》、汪静之《蕙的风》、陆志韦《渡河》八部新诗，都用“不佳”、“不是诗”、“未成熟的作品”等语加以否定。后来他在同年12月15日《晨报副刊》发表《寄语母亲》一诗，其中多是“写不出”一类语句：“我想写几句话，寄给我的母亲，刚拿起笔儿却又放下了，写不出爱，写不出母亲的爱呵。”“母亲呵，母亲的爱的的心呵，我拿起笔儿却又写不出了。”本篇就是讽刺这种倾向的。

秋吉收在引用鲁迅话语的注释里也明白地写道，其引文出处是：“《鲁迅全集》（第7卷），北京，人民文学出版社，2005年版，第41页。”**那他怎么可能不知道这里涉及一个叫周灵均的人呢？……**采用如此移花接木术，并不可取。（103頁）

1.4 周靈均・張友鶯・成仿吾

筆者が北京星星文学社『文学週刊』を求めて北京大学図書館を訪れたのは、2016年9月のことだった。中国人民大学で開催された魯迅生誕135周年を記念する魯迅国際学会発表のために訪れた北京での資料探索、その最大の目的がこの『文学週刊』であった。

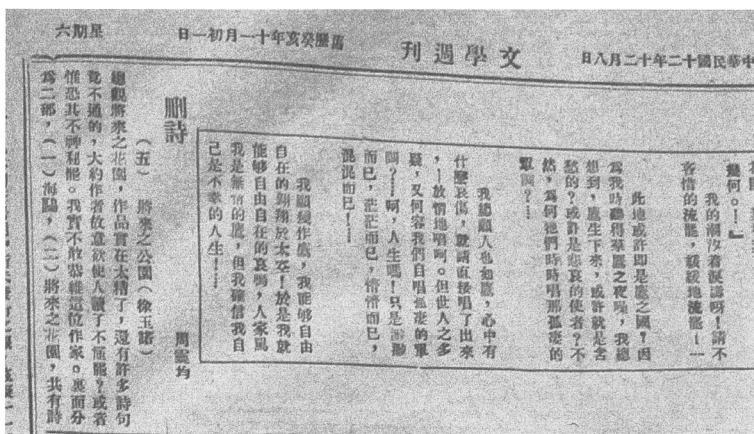
『中文期刊大詞典』（2000年、北京大学出版社）¹⁸によれば、（北京）星星文学社編『文学週刊』は、1923年6月から24年1月までの約半年にわたって刊行され、全部で21号出ている。北京大図書館蔵本では、第15号と第20号が欠落している（欠落のまま合冊）。

原本より「第一號」題字は「星星文學社定期刊出第一種」『文学週刊』（毎星期六出版）「通信處 北京後門二道橋二號」となっている（下掲写真参照）。なお、欄外に「投稿望寄至 北京後門二道橋二號 星星文學社 周靈均收。」の文字が見え、住所の変更はあるが、21号まで一貫して周靈均住所が投稿先で変更はない。

さて、筆者の目指すは無論、Y氏もご指摘の『魯迅全集』「説不出」【注釈】に引かれる周靈均「删詩」である。【注釈】の指定通り1923年12月8日『文学週刊』第17号を開く

¹⁸ 1673頁。なお、同じ誌名『文学週刊』に、1924年12月から25年11月まで発行された、「『京報』附設之第六種週刊」がある。こちらには魯迅「詩歌之敵」等が掲載され、また周靈均も筆を執っている。小論で周靈均との関係にも言及する張友鶯の主編になる。なお、同名の両誌はしばしば混同されている。特に、本稿で取り上げる北京星星文学社『文学週刊』は稀観本である。

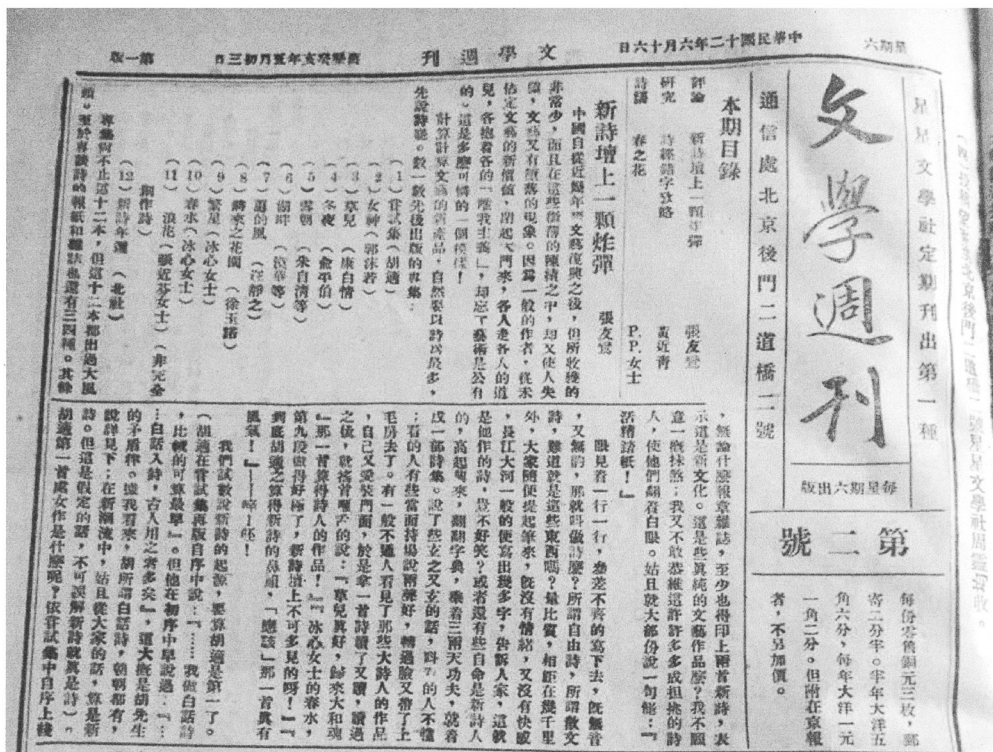
と、そこには果たして周靈均「刪詩」が掲載されている。だが少し様子が変だ。【注釈】によれば「第17号」に「刪詩」全篇掲載と読めるが、実際の「第17号」(12月8日)誌面の「刪詩」は、いきなり「(五) 將來之花園 (徐玉諾)」から始まる。前後の号をよく調べてみると、12月1日発行「第16号」にも周靈均「刪詩」が掲載され、そこでは「(三) 草兒 (康白情)」と「(四) 冬夜 (俞平伯)」が対象とされ、件の12月8日「第17号」は、「(五) 將來之花園 (徐玉諾)」「(六) 雪朝」「(七) 蕙的風 (汪靜之)」「(八) 渡河 (陸志韋)」が標的となっている。なお、以下の表に挙げるが、そのうち「雪朝」篇は8人の詩人を取り上げている。これで推測がつく。つまり、その前の「第15号」(11月24日)にもやはり「刪詩」が掲載されており、そこには「(一) 嘗試集 (胡適) ?」「(二) 女神 (郭沫若) ?」の詩人が登場するに違いない。極めて遺憾ながら、北京大蔵本では、「第15号」は欠本である。



さて、「刪詩」の内容は、【注釈】にも言う如くまさに「都用“不佳”、“不是诗”、“未成熟的作品”等語加以否定」である。周靈均は1925年11月28日『現代評論』2巻51期に「海边的夢」、26年5月31日『語絲』81期に「私語」¹⁹、27年2月1日『創造月刊』1巻6期に「送君珠海之邊」などの詩を書いているが、彼自身の詩は平凡で、他人の詩をすべて「刪」できるような資格は到底認められない。周靈均がなりふり構わず「攻撃」していること明らかである。その論調は成仿吾「詩之防禦戦」と酷似する（厳密には、更に辛辣）。

周靈均「刪詩」を一通り調査し終えて、『文学週刊』を最初から繙いていたところ、一篇の「評論」に目が釘付けとなった。それは、周靈均「刪詩」と、そして成仿吾「詩之防禦戦」と見紛うばかりの「炸彈」であった。その文章とは張友鸞「新詩壇上一顆炸彈」、掲載は1923年6月16日『文学週刊』「第2号」で、成仿吾「詩之防禦戦」（1923年5月）の僅か一月後、そして周靈均「刪詩」の半年前である。

張友鸞「新詩壇上一顆炸彈」も、その趣向は「詩之防禦戦」「刪詩」と全く同様、有無を言わさぬ文壇代表詩（人）の全否定である。「現在無量數的詩人，統統是如此啊，不禁為詩的前途一哭！大家停滯不走，你望著我，我望著你，詩的生命真盡了。」こうした論調は読む者に成仿吾を彷彿させ、また「哈哈！」等の嘲笑も成仿吾、そして周靈均に酷似する。張友鸞の特徴を敢えて挙げるなら古典詩引用の多用である。実は、張友鸞は『文学週刊』



¹⁹ 1926年5月31日『語絲』81期掲載周靈均の詩「私語」には「編者後記」が付してあり、署名は「豈明」つまり周作人で、周靈均のこの詩には広西地方の民俗が表出されて興味深いといった内容である。実は周靈均「刪詩」は周作人の詩についても徹底批判しており、「他是負盛名……「兩個掃雪的人」，這不是詩」とこんな感じである。周作人は恐らくその批判を知っていたであろうが、「紳士的」に振る舞っている。

「第16号」（12月1日）に「中国的一个散文家 陶潜」、1927年6月『小説月報』17卷号外「中国文学研究特輯」には「西廂の批評與考證」などの文章も発表しており、もともと古典文学に造詣の深いことが窺える。

以下、成仿吾、張友鸞、周靈均の各「評論」文にて「攻撃」対象となった詩人を整理して比較してみよう。

比較：“批評家”3名による、「詩壇」徹底批判文の構成（下線は引用者による）

成仿吾「詩之防禦戦」 1923年5月13日 『創造週報』創刊号	張友鸞「新詩壇上一顆炸彈」 1923年6月16日 星星文学社『文学週刊』 第2号	周靈均「刪詩」 1923年11月24日・ 12月1日・12月8日 星星文学社『文学週刊』 第15・16・17号
1 <u>胡適的嘗試集</u> 2 <u>康白情的草兒</u> 3 <u>俞平伯的冬夜</u> (及 <u>雪朝</u> 第三集) 4 <u>周作人</u> (雪朝第二集) 5 <u>徐玉諾的將來之花園</u>	1 <u>嘗試集</u> (胡適) 2 <u>女神</u> (郭沫若) 3 <u>草兒</u> (康白情) 4 <u>冬夜</u> (俞平伯) 5 <u>雪朝</u> (朱自清等) 6 <u>漠華等</u> (湖畔) 7 <u>蕙的風</u> (汪靜之) 8 <u>將來之花園</u> (徐玉諾) 9 <u>繁星</u> (冰心女士) 10 <u>春水</u> (冰心女士) 11 <u>浪花</u> (張近芬女士) 12 <u>新詩年選</u> (北社)	[1 <u>嘗試集</u> (胡適)] [2 <u>女神</u> (郭沫若)] *以上、11月24日第15号? 3 <u>草兒</u> (康白情) 4 <u>冬夜</u> (俞平伯) *以上、12月1日第16号 5 <u>將來之花園</u> (徐玉諾) 6 <u>雪朝</u> A 朱自清 B 周作人 C 俞平伯 D 徐玉諾 E 郭紹虞 F 葉紹鈞 G 劉延陵 H 鄭振鐸 7 <u>蕙的風</u> (汪靜之) 8 <u>渡河</u> (陸志章) *以上、12月8日第17号

成仿吾「詩之防禦戦」と張友鸞、周靈均の文章が如何に深く関わっているかがよくわかる。成仿吾が取り上げた攻撃対象の5人は、張友鸞が周作人を除く以外はその順序からほぼ一致する。徐玉諾もちろん対象となる。

最後に発表された周靈均「刪詩」に今一度仔細に目を注ぐと、興味深い事実に気付かされる。例えば周靈均「刪詩」の挙げる「3 草兒 (康白情)」の部分には、次のようにある。

「別北京大學同學」，不是詩。……「律已九銘」，不是詩。……「西湖雜詩十九首」，……諸首，都不是詩，其餘也無取。（中略）

「一朝氣」，不是詩。「江南」，「詩壇炸彈」文裏已評過。

ここで周靈均が挙げる「別北京大學同學」「律已九銘」「西湖雜詩十九首」は、成仿吾「詩之防禦戰」が例として挙げる詩であり、また、「「詩壇炸彈」文裏已評過。」とは他でもない、張友鸞「新詩壇上一顆炸彈」で批評済みだとわざわざ断っているのだ。ここに、外面の相似だけではなく、三者が一致して共同戦線を張っていたことが明白になる。成仿吾「詩之防禦戰」の一ヶ月後に張友鸞が自己の古典知識を応用しつつ成仿吾の論を補強し、その半年後には今度は周靈均が張友鸞を参考にしつつ、自分なりにより激しい論調でもって成仿吾「詩之防禦戰」を更に徹底した議論へと進めている。張友鸞の「炸彈」、周靈均ともに、成仿吾「詩之防禦戰」の援軍であった。だがその仕業はやや軽薄で、後に魯迅から冷笑を浴びせられることになる。

周靈均については、Y氏が李克義「創造社広州分部考析」（『広州文博』2010年巻）を祖述しつつ紹介している。だが生没年始め詳細は詳らかでないようだ。ただ、彼の創造社での活躍はそれなりに顕著で、例えば1926年12月1日『洪水周年増刊』掲載、「創造社理事名録」にも、主席郭沫若、常務理事成仿吾の下に、理事として郁達夫や張資平らと名を連ねている²⁰。ここでは、新発見の張友鸞を中心に、周靈均との関係などを少し確認しておきたい。小論が主として参照したのは、張恬「張友鸞早期文学活動——兼及一些珍貴的文学史料」（『新文学史料』1990年3期）及び張振群「一縷精香，從歷史深处走来——張友鸞与郁達夫的文学友誼」（『縱橫』2008年6期）等である。

張友鸞（1904—1990）（成仿吾よりも7才年下）、安徽省安慶出身。1922年に私立の北京平民大学新聞系に入学（平民大学の新聞系主任は『京報』を創刊した著名な新聞人たる邵漂萍であった）。そしてその同級生に周靈均がいた。二人は手を携えて星星文学社を立ち上げ『文学週刊』を創刊したのである。彼は創造社の直接の会員ではなかったが、浅からぬ繋がりを持つ。彼は平民大学入学前の1921年に、安慶法政専門学校で教鞭を執っていた郁達夫と偶然知り合い、文学の師弟関係を結んだという。その後彼の処女小説「墳墓」を郁達夫が当時『創造季刊』主編だった成仿吾に紹介、1923年3月発行「第1巻第4号」（成仿吾「創造社與文学研究会」掲載同号）に採用され、晴れて作家としてのスタートを切ることになる。

張友鸞、周靈均の活動は創造社なしには成立しなかった。駆け出しの二人が創造社の中心幹部成仿吾の「詩之防禦戰」をあれほど露骨にフォローしたのは、こうした背景があったからに他ならない。

さて、魯迅の「説不出」（1924年11月『語絲』創刊号掲載）に話を戻そう。『魯迅全集』【注釈】によれば、この文章は、これまで見てきた周靈均「刪詩」と、同じく周靈均の1923年12月15日『晨報副刊』掲載の詩「寄語母親」を諷刺して書かれたとされる。当該詩掲載の『晨報副刊』紙面を見てみよう。

²⁰ 『創造社資料』（1985年、福建人民出版社）、395頁。

周靈均「寄語母親」

我想寫幾句話

寄給我的母親，

……

寫不出母親的愛呵。

……

母親的愛的心呵，

我拿起筆兒卻又**寫不出**了。

十二，十一，夜，白雪飛舞時。

周先生（是今日文壇上初露頭角的一位有神怪的魄力的**批評家**，）他在『刪詩』一文裏把『嘗試集』以次如『女神』，『艸兒』，『冬夜』，『將來之花園』，『雪朝』，『蕙的風』，『渡河』等八部詩集，用『不佳』，『不是詩』，『未成熟的作品』等幾個考語，將所有五六百首詩統統刪了。（中略）**但猶以未讀周君自己的佳作為憾。現在既承周君將近作寄給本刊，記者特為鄭重登載出來，以慰讀者之渴望。（記者）**²¹

ここには魯迅の“説不出”に対応する周靈均の“写不出”が確かに認められるが、この周靈均「寄語母親」には実は記者「後記」が付してあり、その中で記者²²は魯迅を待つまでもなく、既に周靈均の「刪詩」を取り上げて強烈な諷刺を發している。魯迅は「説不出」を書いて周靈均の詩を揶揄すると同時に、そこに附された記者の言葉を敷衍したに過ぎないとも見える。だが、魯迅の真意は果たして記者の諷刺と同じ地平に留まっていたのであろうか？ いわば創造社の“小者”に過ぎない周靈均の“三番煎じ”の「刪詩」を諷刺するのが、果たして魯迅の真意であったらうか。恐らくそうではない。魯迅は「説不出」で表面的に周靈均を諷刺しつつ、真のターゲットは別にあった。本丸はもちろん、周靈均のボスたる成仿吾、そして彼の「詩之防禦戦」だったのである。極めて魯迅らしい手の込んだ“諷刺”であった。

一切成仿吾の名前は出さず、だが「**批評家**が最も安全なのは、創作を兼ねるのはやめることだ。かりに撫で斬りの筆をふるい、**文壇上のすべての野草を一掃すれば（原文：掃蕩了文壇上一切野草）**、当然、気分は爽快だろう。」と「詩之防禦戦」を暗にだが明確に揶揄した「説不出」を「1924年11月『語絲』創刊号」に發表した魯迅は、その同じ『語絲』第3期（1924年12月1日）から、自身初の本格的な新詩連作『野草』連載を開始する。“野草”というそのタイトルは、「詩之防禦戦」で成仿吾が口を極めて罵った新詩への侮蔑表現であったことは繰り返すまでもない。

²¹ 『文学週刊』掲載 周靈均「刪詩」の原本とこの「記者後記」を参照することで、『魯迅全集』「説不出」【注釈】における不自然さの疑問が氷解する。「記者後記」は『文学週刊』の実際の紙面を正確に伝えるが、【注釈】の方は『文学週刊』原本にあたることなく、この「記者後記」を孫引きしつつ、そこに挙げられる作品集に著者名を附加する・項目を整理する等、下手に「敷衍」したことで原本と齟齬を来してしまったのだ。内容ともども、この『魯迅全集』「説不出」【注釈】に全面的に依拠する価値はないだろう。

²² 当時、『晨报副刊』の編集は魯迅の学生、孫伏園が担当していたが、「記者」とは孫なのであろうか？ 彼はその後1924年10月に魯迅『野草』収録詩「我的失恋」の掲載問題で『晨报副刊』を去り、魯迅の支援で新たに雑誌『語絲』を立ち上げる。「説不出」はその『語絲』創刊号に掲載された。

1.5 それぞれの「怨恨」

Y氏は最後に、魯迅と成仿吾の「和解」を取り上げ、拙論に書くような両者間の一貫した「怨恨」は存在しないと主張する。

李克义的文章还介绍说，（中略）1927年3月，为了支持、声援中共领导的上海工人武装起义，抗议英、法帝国主义援助军阀的行为，成仿吾率创造社成员在广州发起一个《宣言》，全称为《中国文学家对于英国知识阶级及一般民众宣言》。这一行动也得到鲁迅的支持，并且在《宣言》上签名。

（中略）

成仿吾自己，由一个“为艺术而艺术”的文学家，逐渐蜕变成一位红色革命家。他走过长征，担任了中共党内的重要职务。1938年，身处延安的成仿吾在鲁迅逝世两周年之际，发表《纪念鲁迅》一文，不但对鲁迅的成就给予崇高评价，而且指出：“关于过去创造社与鲁迅争论的问题，今天已经没有再来提起的必要了。”“自一九三三年以来，我们是完全一致了，我们成了战友。我们的和好可以说是统一团结的模范，同时，他从此成了拥护民族统一战线的最英勇的战士，一九三三年底我与他在上海见面时，我们中间再没有什么隔阂了。”

（中略）

的确，至1933年11月5日，鲁迅在致姚克信中谈道：“成的批评，其实是反话，讥刺我的，因为那时他们所主张的是‘天才’，所以所谓‘一般人’，意即‘庸俗之辈’，是说我的作品不过为俗流所赏的庸俗之作。”这之后，鲁迅再未在文章、书信里有针对成仿吾的批评。这也符合成仿吾本人“1933年底”与鲁迅达成和好的说法。（104頁）

ここにY氏が挙げる二件の文献、魯迅が1927年の広州滞在中、創造社に共感して署名人に加わった「中国文学家對於英国知識²³階級及一般民衆宣言」と成仿吾の「紀念魯迅」は、魯迅との「和解」のまさにシンボルであり、後に長征にも参加し抗日戦や解放戦争の戦士となり、人民共和国成立後は教育者として活躍した新中国の成仿吾を物語る美談として常に引かれるものだ。

実際に成仿吾「紀念魯迅」原文を参照してみよう。この文章をY氏は1938年の発表とされるが、1939年の誤りで、1939年1月25日『魯迅風』第3期掲載。魯迅の死後に書かれたものであることには留意する必要がある。時代的に自然と政治性の強いものである。

成仿吾「紀念魯迅 特稿」

今天我們應該高高地舉起魯迅的旗幟，為著民族解放事業的完成與中國文學的進步，**堅決前進。要拿起魯迅精神反對漢奸親日派與托派漢奸，這夥喪盡天良的奸徒，今天已經**

²³ 「知識」とあるが正しくは「智識」。Y氏の依拠する李克義論文を踏襲する。Y氏は一貫して原本には殆どあたっていないようだが、「中国文学家對於英国智識階級及一般民衆宣言」は1927年4月1日『洪水』（半月刊）3巻30期に発表。なお、英国に送られた宣言原文や起草文は既に失われており、その周辺には明らかでない部分も残るようだ。

從『不阻礙日本，佔領中國』變到了完全成為敵人的走狗來積極進攻中華民族。魯迅永遠宣佈了他們的罪狀，(中略)

關於過去創造社與魯迅爭論的問題，今天已經沒有再提起的必要了。自一九三三年以來，我們是完全一致了，我們成為戰友。我們的和好可以說是統一團結的模範，(中略)一九三三年底我與他在上海見面時，我們中間再沒有什麼隔閡了。

成仿吾はここに繰り返して「1933年以後は、魯迅との間に何のわだかまりもなくなったのだ」と高らかに宣言し、Y氏もその言葉を確信する。ついでに、

面对整个中国的现实，鲁迅显然至少是暂时收起了笔墨之怨。准确地说，是这种笔墨怨恨在家国大义面前，在创造社同人的努力与之目标高度接近的背景下，极大地缓释了。这可能是秋吉收不大容易理解的。 (104頁)

秋吉が中国における抗日戦争を通じた国家の大義を理解できないことは自明だが、ただ、Y氏が断言される「这(1933年)之后，鲁迅再未在文章、书信里有针对性对成仿吾的批评。」は、事実とは異なる。1933年以後の魯迅による成仿吾への「怨恨」の表現は幾つか指摘することができるが、ここでは、二篇を引用しておく。

『小説旧聞鈔』再版序言(1935年7月)²⁴

迨《中国小说史略》印成，复应小友之请，取关于所谓俗文小说之旧闻，为昔之史家所不屑道者，稍加次第，付之排印，(中略)而海上妄子，遂腾簧舌，以此为有闲之证，一九三五年一月二十四日之夜，鲁迅校讫记。

(『魯迅全集』)注2：「海上妄子，遂騰簧舌」

指成仿吾等对鲁迅编印《小说旧闻钞》的评论。成仿吾在《洪水》第三卷第二十五期(1927年1月)发表的《完成我们的文学革命》中说：“趣味是苟延残喘的老人或蹉跎岁月的资产阶级，是他们的玩意，”(中略)并说：“在这时候，我们的鲁迅先生坐在华盖之下正在抄他的‘小说旧闻’。”

『故事新編』「序言」(1936年1月)²⁵

我们的批评家成仿吾先生正在创造社门口的“灵魂的冒险”的旗子底下抡板斧。他以“庸俗”的罪名，几斧砍杀了《呐喊》，只推《不周山》为佳作，——自然也仍有不好的地方。坦白的说罢，这就是使我不但不能心服，而且还轻视了这位勇士的原因。我是不薄“庸俗”，也自甘“庸俗”的，(中略)倘使读者相信了这冒险家的话，一定自娱，而我也成

²⁴ 1935年7月、上海聯華書局再版『小説旧聞鈔』初出。『魯迅全集 第10卷 古籍序跋集』(2005年、人民文学出版社)、158頁。

²⁵ 『故事新編』は1936年1月、上海文化生活出版社初版、巴金編集「文学叢刊」之一。『魯迅全集 第2卷 故事新編』(2005年、人民文学出版社)、353頁。

了误人，于是当《呐喊》印行第二版时，即将这一篇删除；只剩下“庸俗”跋扈了。

一九三五年十二月二十六日，鲁迅。

1924年に為された成仿吾の『呐喊』批判に対して、魯迅は死ぬ直前まで「怨恨」を抱き続けるばかりか、自己の作品集の「序文」にやはりこうもあからさまに書き付けたのはなぜか。「和解」を経ても何も変わらなかったのか。余りにも不可解と言わざるを得ない。

では、成仿吾の方はどうだったのか。「紀念魯迅」の宣言は果たして本心であったのかどうか。『魯迅月刊』2009年8期掲載、閻煥東「成仿吾晩年談魯迅——一種既往的文化現象或心理現象的回顧」は、晩年の成仿吾の肉声を留めた貴重なレポートである。中国人民大学教員で著者の閻氏は、1982年出版の『鄭伯奇文集』の「序文」執筆を出版社の要請で成仿吾に依頼に行ったが、話を聞いているうちに成仿吾が急に魯迅に言及した。当時成仿吾は85才、中国人民大学学長の地位にあった。

… **魯迅的两句诗，就是那最有名的两句：‘横眉冷对千夫指，俯首甘为孺子牛’。**（中略）对这两句诗，毛泽东同志《在延安文艺座谈会上的讲话》里替他作解释，说是要做无产阶级和人民群众的牛，还说这要成为我们的‘座右铭’。**这种解释是不对的。那不是魯迅的意思。魯迅的意思，是群众算不得什么，我自己最了不起！**

（中略）

魯迅这首诗，本来是郁达夫请他吃饭时写的，魯迅也说是‘自嘲’，不是什么好诗，（中略）**魯迅就是这么个人，他是唯我独尊，把自己看成上帝和救世主，人民大众是阿斗，要由他来拯救。**（中略）现在有人心理就是魯迅。其实，**魯迅这个人，我看他不起！**

成仿吾への取材後、成仿吾の発言をまとめた「下書き」を成仿吾自身に訂正してもらいに行った時のエピソードも次のように書き付けている。

… 原稿写的是“**对魯迅先生的思想、品格，我（成仿吾）一向是很敬佩的，**参加革命实践工作以后，体会尤深”，他把“敬佩”二字改为“了解”，这个改动显然是动了脑筋的，更符合他的实际，也**表现了他一贯的耿直的性格。**（中略）从这些改动中，也可以看到这时的成仿吾头脑是清醒的，态度认真而且明确，绝不敷衍。这一点给我的印象很深。

閻氏はこうした成仿吾の「怨恨」には、文革時代の記憶が影を落とすと分析する。

… 三，“文革”中的愤怒和不平部分地转嫁到魯迅身上。十年浩劫中，成仿吾作为“党内走资本主义道路的当权派”被打倒，受尽屈辱和折磨，而每次批斗都必然要涉及到他**同魯迅的关系问题。**他成为“反魯迅”的“急先锋”，“**反魯迅**”成为他的主要“**罪状**”。他过去有关魯迅的各种言论，他与魯迅之间的“文字之争”，一条条都被罗列出来，上网上线，大批特批，并**逼迫他低头认罪。**

1927年「中国文学家對於英国智識階級及一般民衆宣言」における魯迅との協力、1939年

「紀念魯迅」に見える魯迅との共同戦線は、それぞれの時期の成仿吾を強く支えたが、魯迅との「怨恨」は結局生涯、彼を苛み続けたのである。そして、それは魯迅の側も同様であった。

(待続)

追記：本研究は、JSPS 科研費 18K00355 の助成を受けたものである。